



オアシス

文責：副学長
桑原雅次

出雲芸術アカデミーだより 2021年3月12日発行 第35号

3月に入るとめっきり春らしさを感じられるようになります。学校関係は卒業式シーズンですが、忘れられないことがあります。卒業式を明日に控え、準備万端整い、ふとテレビ画面に目をやると信じがたい映像が映し出されているではありませんか…。てっきりCG画面かと思いましたが、東日本大震災の津波が押し寄せる報道でした。職員室で職員と絶句したまま立ち尽くしていたのを今でも鮮明に覚えています。時間が経っても忘れてはならない出来事として記憶に残さなければなりません…。

◎ 幼児科で体験講座を開催！

令和3年度の前期受講生募集に向けて、先日第1回目の無料体験講座を実施しました。体験講座には、保護者同伴で23組の参加をいただき、にぎやかに開催できました。本アカデミーの幼児科がどのような活動をするのかを実際に体験していただきました。

挨拶を兼ねての歌付き遊戯からスタートし、学長さんによる紙芝居や手話を交えながらのゲームなど親子共々楽しく参加していただきました。

また、合間にはピアノやクラリネットの楽器が登場し、アカデミーならではの本格的な生演奏も聴くことができ、楽しんでいただけたのではないのでしょうか…。

幼児期に音楽と接することの大切さを説いている著書があります。その一部を要約したものを紹介しますので、成長期に音楽がいかに役立つかをご理解いただければ喜びます。



◆最初の習い事なら「音楽」がベスト

脳の発達から見ると年齢ごとにあった習い事があります。最初の習い事は3歳くらいから始まり、そのころの習い事としては、ピアノや楽器をはじめとする音楽がおすすめです。その時期は、特に音感やリズム感が身につくやすく、「賢い子」「好奇心の旺盛な子」に育てるうえでこの時期の音楽は非常に効果的です。また、音楽が英語の力を伸ばすことにもつながり、「音」を司る脳の領域と、「言語」を司る領域は、非常に近いところにあります。その領域はほぼ重なる位置にあるため、音楽に接することで言葉の発達にも影響を及ぼすことになります。一方で、音楽は将来的に外国語を習得したいときにも役立つとされています。正式な統計ではありませんが、バイリンガルレベルで外国語を操る人は、子供の頃に音楽を習っていた人が多い事がいえます。 ～略～

小さいころに始めた音楽を定年退職後も続けている方はたくさんいます。音楽は、あらゆる方面へ知的好奇心が広がるので、飽きることはありません。「歴史」「文化」「楽曲」「音楽家」「楽器の構造」等々…。鑑賞や演奏より一歩踏み込んで音楽と接している方も多いと思います。さらにいえば、人とのコミュニケーションに至るまで、音楽の力は及びます。その道の第一人者や企業のトップの方々も、皆さん忙しい中でも、音楽を楽しむ時間をとっていることが多いようです。

音楽は、その人の好奇心と人生とを一生を通じて豊かに広げてくれます。そして、そのスタートは、幼いころに始めた音楽かも知れないのです…。

【参考著書：「賢い子」に育てる究極のコツ 著者：東北大学加齢医学研究所教授 瀧 靖之から】

裏面へ

幼児期から音楽に親しむことは、脳の成長にも良いことがたくさんあるようです。

本アカデミーの大きな目的の一つに生涯教育の理念があります。高校2年生まで在籍することが可能ですので、この間に多くの音楽体験をされ、生涯にわたって音楽と親しんでいただけたらこのうえない喜びです。

◎ 出雲オペラが大成功裏に終わる！

『出雲の春音楽祭2021』をコロナ禍ではありましたが、観客席を約半数に限定し、感染対策も徹底しながら実施することができました。

演目は、ピエトロ・マスカーニ作曲の歌劇《カヴァレリア・ルスティカーナ》です。このオペラの間奏曲はあまりにも有名で、馴染み深い名曲として知られています。今回は、マスカーニが当初描いていた直筆譜面が発見されたのを機に、中井芸術監督が研究題材として取り組まれ、オーケストラ用の譜面に書き起こしたものが演奏されました。いわゆるマスカーニのオリジナル稿の世界初演という、注目に値する価値のある公演となったことはいうまでもありません。

オリジナル稿を再現すると簡単に言っても大変な苦労があったことと思います。一つには、「調性」の変更です。半音でも調性が違ってくると音楽の景色が違ってきます…。その様子は聴き比べないと分かりにくいのですが、12月のプレ公演では実演してくださったので、はっきりと理解できたところです。演奏者にとっては、とても大きな影響が出てくるものと思われます。

次に、チューニングの違いです…。現在音合わせは、440Hz～442Hzが標準ですが、バロック時代には半音低い415Hzだったそうです。マスカーニの時代には、紆余曲折を経ながら435Hzにウィーン国際音楽会議で定められたとのこと…。今回の公演はオリジナル稿なので、チューニングも当時のピッチ（435Hz）に合わせ、1/4音低く設定されました。弦楽器の弦は常に元に戻る習性があるので、管打楽器との合わせが大変だったことがエピソードとして聞かれました。その他にも、小節数が増えたり表現する楽器が現行版と異なっていたりと多くの相違点があり、慣れない分、違和感もありましたが、それ以上に興味深さが増し、話題性に富んだ公演となりました。

本番の演奏は、演じるキャストの皆さんのスケールの大きな発声や満身の演技に、目が離せず感動の連続でした。出雲フィルオペラ合唱団は、オリジナルの部分が多いのにもかかわらず果敢に挑戦していただき、本番の見事な合唱には圧倒されました。また、出雲フィルフェスティバルオーケストラのしびれるような旋律感からダイナミックな表現に、オーケストラならではの繊細さと力強さを感じて大いに満足したところです。

そして、これらを率いた指揮者の中井芸術監督は、譜面起こしの段階から本番に向けての長期にわたる期間を、身を粉にしながらオペラ公演を成功に導いていただきました。本当に感謝の言葉しか思い浮かびません。また、本アカデミー出身の角直之さんには、演出助手としてかかわっていただき、様々な困難を解決していただきました。彼も公演成功のキーマンであったことを忘れてはならないでしょう…。このように、OG・OBの活躍を今後も期待したいところです…。

最後に出雲オペラ公演を影で支えていただいた多くのスタッフの皆様のご理解とご協力があったからこそその賜物と心得、共演者の皆さんと共に公演成功の喜びを分かち合いたいと思います。



【リハーサルの様子】

【このたよりは、本アカデミーホームページでも掲載します <https://www.izumo-zaidan.jp/academy/>】